

## 峰床山

安溪 芙美子

三条京阪七時廿分葛川梅かつしかわの木行の京都バスに乗る。駅前駅前の無粋な陸橋が晴れわたる青空を幾何学模様幾何学模様に区切るのを見ているとふっと胸が熱くなる。

“十一月二日は天長節だから、必ずいいお天気なのですよ”  
明治生れの母が口癖のようにいつていたその口調がなつかしさを思い起させるのだろう。

車内は無論超過密、北山、比良山を歩く若者が殆どでWさんをリーダーとする中年男女の一団は場違いな雰囲気だった。

バスは大原辺りまでノンストップである。花折峠をはじめてバスで越えたのは、若狭街道に続く坊村という田舎に友人の母を訪ねた時、昨年の秋だった。

山あいの村々（行政上は京都市左京区某町とか大津市何町とかいうのだろうがそれはやはり村という方が相応しい）をつなぐ細い山裾を縫って走るバスに秋色の濃い山膚が触れ、樹々の枝々をかきわけけるように走っていると、紅、茜、淡茶、濃茶、橙、緑、青、濃緑、様々な色の奏でる交響曲が終曲の盛り上がり盛り上がりにタクトを振っているように思えた。燃え上る秋に包まれた幻想の隧道を永劫の彼方に運ばれるあやしいときめきに似た思いが湧く。

萌え出る樹々の緑や山の秋、蒙古草原の広い広い大地の緑、枯草、私なりに数多くの風景はこころにやきついていている筈なのに、こつして赤と緑を基調にした山々の光と色の交錯交錯の中を掻きわけ包み込まれる

ように進むおどろき、よろこびは、いつもはじめてのように私を充して了う。然し二度目に越す花折峠の趣は以前より大分変容していた。山裾を切り展き石垣を積み、そこにすむ人々のくらしに役立つように道幅を広げ、道の向う側では地を揺るがせて発破が響く。杉木立の間にみえる左手の山裾は大きく割りとられ蔦や枝を絡めた土塊は新道に堆く盛り上り、シヨベルカーは絶間なくその土塊をつみ上げ走り去る。表層を剥ぎとられむき出しの山肌を転がり落ちる無数の小石が私には山の滾す涙に見える。

京都と若狭を結ぶ街道のネックになっている花折峠ではあるが、自動車走り過ぎるようになれば、人々は便利さを得る以上に失った自然の大切さについて気付くことだろう。その時ではもう遅すぎるのだけれど。文明という愚かな至上命令はやがてすべての自然を破壊しつくした後、人間そのものも自滅させてゆくことだろう。山へ行く度に味わう自壊作用にも似た開発という名の自然破壊への憎しみに息苦しくさえなつて了う。

「気分でも悪いのですか。仁丹でも飲みなさい」  
隣に座るWさんが掌に銀粒をのせてくれた。

「余り山が痛めつけられて、一寸悲しい気がただけなんです」  
「仕方ないね今は、いつか人々はもっと山を大切にすればよかつたと思うでしょうがネ」

「それではもう遅いでしょ」  
「いつももう遅いんです。それが人間というものなのでしょう」  
私は声もなくWさんの自嘲にも似た言葉をくり返していた。いつももう遅い。そう本当に気付いた時は手遅れなのだ。でも私に何が出来るだろう。発破をかける人もブルドーザーを動かす者もシヨベルカー

を運転する人も、皆それぞれに家族があり、みなそれぞれの毎日を生きていく。外にどうしようもない。山は打ち壊き樹々は掘り倒し、海や川は汚れ放題に汚し、そして只管に生きる外には術もないのが私達なのだ。昔の人達がしたように海や山からつましく少しのものを貰って生きている間は自然は寛大に惜しみなく恵みを与えてくれるだろう。でも今のように巨大な機械にものいわせ、いどみかかるような収奪をくり返し、涯しない欲望のままに何も彼も根こそぎ取りつくす姿勢をもつ限り、いつか自然は人間を懲らしめることだろう。その時にどうあがいても多分回復は不可能に違いない。山へ這入る楽しさより自らの愚かさにいらだって私はすっかり滅入っていた。

「仕方ないですよ。所詮滅びるものは滅び、又滅びた中から生まれるものが摂理とでもいうんじゃないでしょうか。折角の山行きだし、元気出さない。山の中はこんなものじゃないですよ。」

Wさんは慰める口調で小さく笑った。

坊村の手前、中村という部落でバスを降り、目の前の中学校の横から谷添いに山へ入る。地図を広げると伊賀谷から伊賀山をこえ一時間四十分で八丁平へつく予定だが、私のような北山の初心者には谷をこえ尾根筋を過ぎると右も左も山、山、山、と迫るようにイむ山々の黒々と青空に伺う北山杉の植林や、畳々と重なる奥の燃え上る錦の紅葉常盤木の緑に目を奪われ茫然と立ちつくすことが多い。

「あんたみたいに立ち止まってたら八丁平に十一時半にはつけへんよ」

追い抜く人が笑って過ぎる。

「あの人ほんまにのろいなあ。帰りのバスに乗りおくれたらわややで」

“北山へ来た最初の頃は誰でもみなあの人のようなもんですよ。バ  
スに遅れてもいいじゃないですか。歩いて帰れば明日には着きますよ  
”

“ Wさんは女性に甘いからなあ ”

小声の言葉が耳に入って来る。私以外のメンバーは既に何十回も歩  
き馴れた人達で、このブッシュの次はあの木下道、つづく熊笹の山腹  
を横切ると沢下り、と殆ど空んじているほど歩き馴れている。又それ  
だからこそ北山の面白さが忘れられなくて休みの度に出かけて来るの  
だろうが、私はまだ四回ぐらいの初心者だ。立ち止まるなどというのは  
野暮の骨頂。見遙す彼方の目路の屈くそのどこにも家や街や道すら見  
えぬ山又山の懐の中、メンバーの人目がなければ寝転がり叫び声を上  
げ、澄み透る空に向かって手を広げ、体ごと背一杯その山の気を吸い  
とりたい。敬てる耳に入る雉の啼声、鳥の羽音、そして山全体にそこ  
はかとなく漂う嵐気。

「いいでしょ。歩けないくらいでしょ。私も最初は圧倒されちゃっ  
て、だってこんな山って関東にもどこにもないんですもの。でも少し  
馴れてくるともう歩くだけが楽しいみたいなそんな気分になるよう  
ですよ」

まだ若い女の人だがいたわるようにそう言った。本当、そうかも知  
れない。多分その通りだろう。風景に気をとられることもなく黙って  
下を向き歩くばかりの人達をみれば、私だっていずれそうなるかもし  
れないと思うのだが、何しろ私はまだ北山の初心者、流れる谷川の  
水の美味しさ、道に散り敷く錦の枯れ葉の踏み心地、万華鏡裡の摩訶  
不思議界をさまよう思いに心もそぞろ身もそぞろ、遅れがちになるの  
も仕方がない。

八丁平にはそれでも予定通り追いつけた。こんな山の上にこんな広い平地が、と驚くほどそこは広々とした湿地帯がある。あやめ科の植物があちこちに群生し花の盛りの見事さが思われる。少し前までは湿地帯の中に木馬道が通じていたらしいが今は植物保護のため通行止になっている。それでも商売人らしい数人がせつせと水苔をとり陽に干していた。水苔もとらねば腐って滅びて了うだろうし少しは私も頂戴してもいい筈だ。などと言いつつながら足がかりを探っていると先を歩いていた仲間達が既に水を絞りリュックに詰めている。

「毎年十一月三日の峰床山についてくるのも半分はこの水苔がほしうてなあ、こんなええ水苔は買い度つてもおへんさかいな」

「あんたもどすか、実は僕もこの水苔とりたいので欠かさずついて来ますわ。けどお互い余り立派とは言えまへんな」

「大きな声出したらWさんに聞こえまつせ」

「かまへん。リーダーは耳遠おすがな」

馴れた手付で水を絞り次々に採集している男女のひそかな後ろめたさの罩る会話にふと嫌悪がました私は既に姿の見えないリーダーを追った。

Wさんは七十五才だと聞いている。

北山を愛し北山に憑かれ北山へ行かずにおれなくて数十年を歩きつづけ、今では幾十幾百とある峰や谷を知りつくしているWさん。

「一人で歩いている旅に段々仲間が増えましてね。然し大勢の仲間はいても僕はいつも一人で歩いている様なものです」

初めての仲間入りした時Wさんは私を振り返り体の奥で笑うような表情を見せてそう言った。

七十五才の歳月は壮年の男性の多い仲間になると物憂く手頼りなげ

にさえ見えたものだが同行する機会が重なるにつれ、山を知りつくした人の確かな足取りは年令に関わりなく、それはやはりリーダーに相応しいものだと思わずにはおれない。

同行した仲間が水苔とりに夢中になっているのも気になるが私はともかくWさんに追いつかなくてはと、背丈よりも伸び切った熊笹を掻き分けかき分け登ってゆくと道はやがて疎林となり笹の丈も短かくやっと前をゆくWさんに追いついた。

「Wさんは水苔とられませんか」

「僕は何も取りません。山を歩く人は山のものは何一つとってはいけないものなんです」

批難とも受取れる言葉には哀しみの響がある。私は黙ったまま、Wさんの足跡をなぞって歩く。

妻と死別し子供とも別れ住みただ只管に北山をのみ歩きつづける人の内にひそむものは何なのだろう。

「人生も終わりに近いと思いますとね。この山の一步一步がいとほしくてね、こうして歩きつづけてこの足の止まった時が僕の死であるようにと、そう念じながら歩いているのですよ」

まるで私のところを覗くようなそんな言葉をWさんはふり向きもせずいう。

私はそれと同じ言葉を聞いたことがある。もう二十数年も前だった。季節は忘れて了ったが、汚い襤褸の羽織とも法衣ともつかぬものを着た垢まみれの男。若い私には三十才以上の男はよほどの爺さんでない限り四十も五十も六十も同じように見えたがその六十余りの汚い男が家に訪ねて来たことがある。私を養女にしていた養父は社会的地位もあり立派な人格も備えた人で、その頃の私が世の中で一ばん偉い人な

のだと尊敬していたその養父が訪ねて来た檻褌男を丁重にもてなすが不審でならなかった。

凡ての疑團は須く氷解させるべしというのが生来の国是となっている私は茶菓を出す序にその男を瞞めて言った。

「どうしてそんなに汚いお召物を着ていらっしゃるのですか」

「これしかないのです」

「何か二、三枚差し上げてはいけませんか」

「ありがとうございます。然し僕は毎日山や野を歩くばかりなので頂いてもすぐ汚れるのです」

「何故山や野を歩きつづけていらっしゃるのですしょう」

「旅が僕を呼びつづけるのです」

「お家もご家族もありませんの、歩いてどうにかなるのですかしら」

「歩いてもうともならないから歩くのです。この足の止まった時は死ぬ時です」

私は驚きあきれ少し頭がどうかしているのではなどと思った。それが種田山頭火という俳人だとずっと後になって知ったが、今Wさんの言葉を聞いているとふっとそんな思出も甦えり、飄々と前を行くWさんに山頭火の面影が重なり、自分もまるでこのままどこまでも歩き続けてゆくような錯覚に陥入る。

山腹に近づくに連れ風倒木が多くなる。枝や葉を失った大木が倒れもせず白い木肌をみせて亭々と青空を限るように幾十本もつつ立つ風景は異様である。

「これが峰床山です。僕はこの風景が好きでね。余分な枝葉を失った大木が倒れもせずにつつ立っている。荒涼とした中に力強さがある

でしょう。人間もこういう終末を迎えたいものだ、ここへ立つ度に思っんですよ」

Wさんはそういつて深々と煙草を吸い込んだ。

峰床山は北山では二番目の高峰だが高いといっても京都の山々はどれも千米未満だから登りにくいということはない。けれども山が深くて四囲を見回しても畳なわる山又山の連りは人の住む気配から遠く距てられ、高圧線の鉄塔だけが場違いな文明を誇るように峰や谷をつないでいる。

「此処まで来るともつ北山杉も見当たりませんね」

「そうですね。こんなに深い山では採算にあわないということでしょう。尤もそのせいで僕は自然のままの山の木を見られるということなのですがね」

どうですこの風倒木の素晴らしさ、四十年も前からこうして立っているのですよ、などといいながらWさんはいとしげに傍の白骨ともみえる木の幹を両手で撫でていた。

浮き世の欲を肩いっばいに詰めこんだ仲間たちがぼつぼつ上ってくる。

柔らかな眼指して仲間を迎えるWさんの年輪の刻まれた枯れた風貌はあたりの風倒木に余りにも相応しく、私はいくらかの痛ましさをもって横顔をいつまでも覗めていた。

(1974-11-3日 1975-7-27書)